

マザー・テレサの

6

山谷に庶民のホスピス

修道院だ。泪橋交差点か

の宣教者会(本部)イ

ンド・コルカタの山谷

炊き出しは韓国、フイ

秋風が吹き渡る東京・隅田川の河岸。青いシートの小屋が並ぶ堤の公園では、バック入りのカレー弁当に500人近い行列が出来ていた。山谷のドヤ街の住人やホームレスの人々が週末の楽しみにしている炊き出しだ。78年の開設後、毎週土曜にこの慈善活動を続けているのは、マザー・テレサがつくった「神の愛



リピン、インドの修道士4人が中心になり、30人以上のボランティアが手伝える。日本人のほか東京在住の韓国、ベトナム、インド、欧州などのビジネスマンや留学生たちも、月4000円の炊き出し入れが届く。81年に初来日したマザーも山谷を訪れた。案内した東京在住のベルギー人、アンドレ・ポルガルト神父(70)によると、マ

ザーが驚いたのは泥酔して道に寝ている男の姿だ。「豊かな国」日本のイメージとの落差。「なぜ誰も助けないの。東京の貧しさはインドよりひどい」と漏らした。翌82年の来日時には国会議員との会合で語った。「日本には一切のパンがなくて飢える人はいない。でも孤独で寂しい人が大勢いるのです」

高度成長期は多くの労働者がいて活気があった山谷。今、街を歩くと、酔っぱらいより高齢者の姿が目立つ。約3500人の住民の平均年齢は65歳前後。生活保護を受けたりと暮らしている。そこに高齢者のホスピスを開いた人がいる。「きぼうのいえ」の山本雅基さん(43)だ。02年、借金を寄付で4階建ての施設を建てた。「マザーが活動したインドと違い、日本では行き倒れても救急車を呼べば済む。しかし、退院しても行き場がない人が多い。そんな人々に終のすみかをと考えたんです」

26歳でカトリックの洗礼を受け、上智大の神学部に進んだ。卒業後、難病の子を支える団体で10年間働いた。しかし、人間関係に悩んでうつ状態になり、家にこもりきりになった。働かないまままでいたら、どうなるか。考えるうちにホームレスの人々の姿が身近に見え始め、ホスピス開設を思い立った。

初考えた「ホームレスの人のホスピス」から、日本の高齢化社会と老人の孤独を映す「庶民のホスピス」になりつつある。開設から5年間でみよった人は51人。8月初めには引き取り手のない遺骨に対し、屋上の礼拝堂で「施餓鬼供養」と呼ばれる仏教の法要を営んだ。死者が迷わず苦しみをから解き放たれるよう、宗教を超えた弔いと祈りの場を設けたのだった。マザーを尊敬しながら、その活動拠点だったコルカタに行ったことはない。しかし、「コルカタはあなたの身近にある」というマザーの言葉が好きだ。山本さんにとっては「山谷が私のコルカタ」なのである。(編集委員・竹内幸史)

おわり

